花の日訪問交流会の記録

令和 7 年 6 月 6 日（木）　於：よつばの里（鶴岡市本町三丁目）

花の日の由来と理念

「花の日（Flower Day）」は、19 世紀のアメリカで始まったキリスト教の伝統行事で、6 月第 2 日曜日に教会の礼拝で花を捧げ、病院や施設を訪問して人々に花を贈る活動が行われてきました。花は、神の創造の美しさと人々への祝福の象徴とされ、今も世界各地で、地域のつながりや思いやりを育む機会として受け継がれています。

日本でも、こうした理念に基づき、地域の保育園や教会が福祉施設を訪問する取り組みが続いています。厚生労働省も、障害福祉サービス事業所が地域に開かれた存在となることを重視しており、こうした交流はその実践の一環でもあります。

荘内教会保育園による訪問交流

今年も、鶴岡市本町三丁目にある荘内教会保育園の年長組園児 19 名が、花の日にちなんで「よつばの里」を訪問しました。午前 10 時頃、3 名の保育士に引率された園児たちは、1 人 1 輪ずつ色とりどりの花を手に、笑顔で来所。保育士による保育園の紹介の後、居室中央に並んだ園児たちが讃美歌を披露すると、よつばの里の利用者たちからは割れんばかりの拍手と歓声が沸き起こりました。

その後、園児たちは 1 人ずつ、利用者全員に花を手渡しながら「元気でいてください」「幸せでいてください」と声をかけ、心を込めて祈りを届けました。施設内は一瞬にして華やぎ、花と笑顔が交差する温かな空間となりました。

🤝地域と福祉をつなぐ小さな架け橋

この訪問交流は、特別な宣伝もなく、マスコミの取材もない、毎年恒例のささやかな行事です。しかし、園児たちの純粋な思いやりと、利用者たちの喜びに満ちた表情は、地域福祉の本質を静かに物語っています。

わずかな時間ではありましたが、よつばの里全体が幸福感に包まれ、園児も利用者も名残を惜しみながら再会を誓い、笑顔で別れを告げました。

🌟この交流が示すもの

花の日の訪問は、単なるイベントではなく、「地域の子どもたちが福祉の現場に触れる」「障害のある方々が地域の一員として迎えられる」

——そんな未来への希望を育む営みです。よつばの里は、これからも地域に根ざした福祉のあり方を模索し、こうした交流を大切にしていきます。